

遠雷

立松和平



遠雷

立松和平

遠雷^{えんらい}

©1980

一九八〇年五月二十四日 初版発行
一九八〇年十二月一日 三版発行

著者 立松^{たてまつ}和^わ平^{へい}

装画 吉田勝彦
装幀 菊地信義

発行者 清水勝
発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話 営業 〇〇三―四〇〇四―一三〇二
編集 〇三―四〇〇四―一八六一―二
振替口座 (東京) 〇一―〇八〇二

印刷 亨有堂印刷
製本 小高製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

遠雷

汗ばんだビニールが眩しかった。よく見れば微小な水滴一粒一粒が虹を含んでいた。ふくれて重みが支えきれなくなると、水滴は涙のように流れ落ちた。そこから陽光が鋭く射してきた。満夫は汗に湿った丸首シャツを脱いで頭上の鉄パイプにかけた。黄ばんだシャツから湯気が昇った。灼けた鉄パイプはうっかり握ると火傷をした。

午後から急に日射しが強くなった。たぶん今年一番の暑さだ。トマトの根が力強く土を噛み実をふくらませていく様子が浮かんた。露地物のトマトはやっと苗を植えたばかりの頃だった。満夫は根元から地中温度計を引きぬいて見た。あわてて天窓を開き、ビニールをめくって隙間をつくった。柔らかく風が吹込み、蒸れた土のにおいの中にいたことに今さらながら気づいた。鉄パイプにさげたラジオから退屈なバイオリンの曲が流れていた。

ビニールの隙間から団地が見えた。コンクリートの真新しい四角の建物が三十、整然とならんでいた。どれくらい人間が棲んでいるのかわからない。団地の騒音が風に乗ってざわざわと流れってきた。

満夫はホースでトマトの根元に水をかけながら、床土の水のしみ具合をじっと見つめた。根は水をかぎわけ伸びていく。水が土に深くしみ込まないと根は上のほうにしか張らないのだ。水や追肥をおしまずにやると、トマトは日一日充実していくのがわかった。この六百坪のハウスには隅ずみまで満夫の気持が通っていた。トマト栽培二年目の今年は失敗するわけにはいかなかった。去年はホルモン剤をやりすぎ、受精が不完全になって種なしの空洞果になった。とても売れるものではなかった。

ビニールの隙間に顔がならんで覗いていた。葉叢の陰になって満夫の姿はわからないらしかった。女が三人だ。背伸びしている足首がビニール越しに見えた。

「何だよ、何か用かよ」

強い声が思いがけない方向からしたせいか、女たちは一様にギクリとした表情をつくった。満夫はトマトの葉陰からゆっくり近づいていた。上半身裸の若い男に女たちはまた少したじろいだ。一步ごとにゴム長靴からぼこぼこっと空気の洩れる音がした。

「お兄ちゃんさあ」と真中にいた女が愛想笑いをした。

「トマト安く売ってくんないかしらねえ。おいしそうなトマトがいっぱいじゃないのお。いいにおいよ」

女たちは満夫の出方を息をつめて待っていた。ビニールについた掌の肌色が鮮かだ。女たちの視線を眩しいように浴びて、満夫は口を動かした。

「はいってこいよ」

子供の手を引いた女たちの影が移動してきた。ビニール越しに見る団地は水の中にあるように揺れて歪んでいた。

「うわあ、むっとくる」

口ぐちにいつて女たちはハウスに踏込んできた。水をまいたばかりなので地面はぬかるんでいた。

「駄目よ、爪で触っちゃ。傷がつく」

「すごいでしょう。トマトはお百姓さんが苦勞してね、こうやってつくるんだから」

あたりは急にざわついた。満夫はホースで水をまきつづけた。化粧のにおいが気になった。

「いっぱい赤い電気がついてるみたい」

甲高い子供の声が出た。そうだ、赤い電球だ、と満夫は思った。きれいな赤がいたところにあった。どうせ出荷できない熟れた赤いやつを売ってやればいい。

「スーパで売ってんのは、腐りかかったやつさ。トマトのかたちしてるだけで、味がねえよ。ここから出荷するのは青いやつだからな。あんたらの口にはいるまで三日はかかるべ。腐ってちやうど赤くなんだ。よく見てみろや。同じ赤でも艶が違うからよ」

満夫はなめらかに舌を動かしていた。団地の女はいつも遠くから見ただけだった。亭主を朝早くに送りだした女たちは、睡いような日溜りの団地で、いかにも退屈そうに子供を遊ばせたり立話をしたりしていた。中には眼をひく女もいたが、泥だらけの野良着の満夫がむこうからどう見えるかと思うと、とても口をきけなかった。話しかける口実もなかった。

「みんなで話してさ、あたしたち代表できたんだから。特攻隊の気分でさあ。恐そうなお兄ちゃんだって噂だから」

最初に声をだした女が満夫のすぐ前に立った。髪を薄く赤に染めていた。色にむらがあり、昔もっと濃く染めた名残りなのかもしれない。手首をつかまれた子供が走りたくて暴れていた。

「観光農園とまちがえんなよな」

「おまけしてよね。近所のよしみでさ」

「何が近所かよ」

いつてから満夫は腹を立てた。地面に置いたホースが身もだえした。蛇口を締めてから満夫は腰にさげていたタオルで手をぬぐい、女たちに顎をしゃくった。

「売ってやっからよ。いれもの持ってきたんか」

「威張ってるみたい。いいけどさ」

女たちはおどおどと手提を満夫にむかって突きだした。いつでも逃げられるよう腰を引き半身に構えていた。

「試しにさあ、三百円ぐらいちょうだいよ。どんなもんだかさ」

髪を染めた女が挑む調子でいった。安物のワンピースに身体の線が透けていた。満夫は腰の花鉄をとり、手近の赤い実をちょっちょつと四個切った。女はトマトを両手に持って鼻の頭に皺を寄せた。満夫はもう一個切って渡した。女はわざとらしく肩をすくめ、子供に持たせた手提の中にトマトをいれた。満夫はほかの二人の女にも同じようにした。掌に生あたたかい百円玉が九枚

残った。

女子供の影が汗ばんだビニール膜のむこうを揺らめき遠ざかっていった。めくりあげたビニールの隙間から満夫は芝生を横切っていく女たちを見送った。四階建ての屋上に陽炎が立っていた。空にむかつてコンクリートが溶けていくように見えた。その背後はるかに、峰に雪をいただいた連山が鋭く光っていた。手鏡のような小さな満夫のビニールハウスと呼応し輝きあっていると思った。

昔から変わらないのは山だけだ。二年前には団地などなかった。一帯は水田と栗畑と雑木林で、草木や鳥獣虫魚のひっそりとした気配に満ちていた。雑木林に囲まれた幅広い谷のかたちで田がひろがり、中央を川が流れていた。何代もかかって拓き整えてきた美田だった。米もよくとれた。村の田はこのあたりに集中していた。田起こし田植え草とり稲刈りと、満夫は両親と陽のある間野良にでていた。村の人間と遠くから大声で挨拶をかわしあった。野良でする噂話で村で起きたことは手にとるようにわかった。夕方水路に釜を仕掛けておくと、朝には小ブナやドジョウがずっしりと重いほど獲れた。細長い竹籠の筥にどうやってはいったのか、一キロもある鰻が窮屈そうに掛かっていることもあった。

ここに県が住宅団地と工業団地をつくる計画をたてたのだ。みんなは札東で横面を張られるようにして土地を手放していった。東京で銀行員をしている兄の哲夫に相談すると、高く売れるのなら売ったほうがいいと素気なくいわれた。村中が買収に応じたので、一軒だけ頑張っていることはできなかった。値をつり上げるため意地をはっていると思われるにきまっていた。ブルドー

ザーの群がやってきた。樹木を根こそぎに踏み倒し、土を削って田を埋めた。栗畑をつぶし、川の流れを変え、瞬く間に地平線が見えるほどの赤むけの平地をつくった。地面に積木をならべるようにして建物ができいった。トラックに荷物を積んで人が集まってきた。農道がひろげられアスファルト舗装され、車がひんばんに通るようになった。スーパーマーケットや寿司屋やスナックができた。まるで手品を見せつけられるような手際のよさだった。

土地を手放す時の条件どおりに、満夫と両親は工業団地の製菓工場に雇われた。東京の兄に電話で相談すると、働き口があるなら口座の金に手をつけずにすむからいいじゃないかといわれた。満夫は製品を街の問屋におさめる小型トラックの運転手で、両親は工場の清掃係になった。つまらない仕事だった。金は通帳にうなっていたので我慢して働くことはなく、三人は話しあって同時に辞めた。他の村の連中も工場勤めはつづかなかった。満夫はかろうじて残った草だらけの土地にビニールハウスをつくった。トマトでもキュウリでも花卉^{かき}でもいい、とにかく農業をやりたい。やり直した。

「うわあすごいじゃない。みんな、こっちよお。はいっても怒られないって」

はしゃいだ声とともに、手提を持った女たちがぞろぞろはいってきた。十人はいた。思わず満夫はラジオを消した。ばらばらと小石でもほうったように幼児が五六人畝の間の通路を駆けてきた。

「新鮮よねえ。あんまり安くないけどさ」

先頭の小太りの女がにこにこ笑っていた。女たちは犬の腹でも撫でる手つきでトマトを撫で

さすっていた。

「勝手に触わんなよ。傷がついたら、そこから腐ってくんだからな」

満夫の大声に、女たちは険しい眼つきをした。小太りの女は眼尻に皺を寄せてにこにこ笑いをやめず、満夫に一步にじり寄ってきた。

「子供押さえてろよ。そのへんに農薬がおいてあんだからな。かぶると死ぬぞお」

女たちは一斉に自分の子供の名前を呼びながら通路を駆けつけた。遠足じゃねえんだからと満夫は口の中だけでいった。暴れる子供を横抱きにした小太りの女が息ばった声をだした。

「お兄ちゃん、さっきはとってもやさしかったって。ハンサムだしさあ」

太った女の額におしろいの下から汗がふいていた。口紅が唇から少しはみだしていた。子供が丸っこい短い足をばたつかせ、赤いスカートの中にパンツが見えた。子供を抱いた女たちが集まってきた。

「みんな三百円か。大安売りだぜや。手提の口開いて待ってろや」

満夫はならんでならんでと腕を前に突きだし、目分量で同じような大きさの熟れた実を五個ずつ切って渡した。女たちは遠慮もなくまじまじと満夫の顔を見つめてから手提の口を閉じた。俺はそんなにハンサムなのかなと満夫は思ってみた。おだてて少しでもトマトをまけてもらおうとする女たちの魂胆だ。洗ってから食えよといいながら、満夫は子供たちに熟れすぎた小さなトマトを一個ずつ渡した。

闇はトマトの葉陰や根元からたまってきた。風にひんやりした感触があった。めくってあったビニールをなおすと、ざわざわと動いていた葉が急にしずまった。スコップを洗い、ハウスに鍵をかけた。ビニールを破ればどこからでもはいれるので本当は鍵など役に立たないのだ。外にでたとたん、青臭い草いきれが胸元から昇るのを感じた。身体が火照り、血管の中が泡立っているようだ。勤めから帰ってきたらしい車のライトに正面から照らされて眼が眩んだ。

黒い帯のようなアスファルト道を渡ると母屋だった。残された土地は、庭の真中を道路が走る格好になった。仄明るい空に瓦屋根の大きな輪郭が浮かんでいた。応接間だけ電燈がつき、祖母がソファに寝そべってテレビを見ていた。テレビの色が妙に生ま生ましかった。新築してまだ一年とたっていない家だ。金をふんだんにつぎこんだ堂々たる建築だったが、成金ばかりのこのあたりでは家を新築するのがはやり、目立つわけではなかった。工務店の口車に乗って隣近所と張合った。床柱は紫檀を使い、床は檜張りにし、応接間のかたちばかりのマントルピースは台湾の大理石だ。スイッチをいれると虹がでたようになるシャンデリアもいれた。見えないところに金をかけるのがいい建築だと工務店の男はいった。ベニヤなど一枚も使っていない。いくら部屋数が多くても来客があるわけではなく、一人一部屋あればたくさんだった。ほとんどの部屋は畳が黄ばむからと雨戸を閉めきったままなのだ。畳や壁に黴が生えているかもしれない。朝玄関にひろげておいた雑巾はそのまま乾いていた。満夫は納屋の脇の手押しポンプで雑巾をゆすぎ、足を拭いた。一階の電燈を点けてまわった。濡れた足裏が床に粘りついた。上等な檜だったが完全に乾燥しないまま使ったのか床板は心持ち反返し、上の部分のニスが剥けていた。居

間の畳は埃っぽくざらつき、足裏に膜ができたようになった。トイレも台所も床は砂埃をまいたようだ。

テレビの音が家中に響き渡っていた。満夫は応接間のマホガニーの扉を勢いよく開け放った。音楽が部屋中にはねまわり、耳が痛いほどだ。満夫は怒鳴って祖母を呼んだ。

「婆ちゃんよ、夕飯どうなってるんだよ」

祖母がソファからゆっくりと身体を起こした。サーフィンをしているハワイの海の青が祖母の皺だらけの頬にかかった。

「台所のテーブルにならべてあるべ。鯖焼いてあつから、味噌汁あつたためて食べなね」

高いのと低いのが混じった裏返るような声だった。祖母はレザー張りのソファに蒲団を敷いていた。

「一日中テレビ見てたんかよ」

「何、何かあったけ」

祖母が顔をしかめて耳をむけた。めったに風呂にはいらないので、艶のない白髪の中で耳たぶは垢だらけだ。眼の両端に薄黄色の目脂がたまっていた。

「テレビばかり見てっと、白内障がすすむぞ」

目脂拭けよというつもりで満夫がほうったタオルは床に落ちた。一日中首にまいていた汗臭いタオルは緑色のカーペットの上でひどく汚れて見えた。わかったのかわからないのか祖母は深く二度三度頷き、ソファの上の蒲団に縮まるように寝そべった。満夫は急に空腹を感じ、重い扉を

後手に投げつけた。扉はテレビの音に撥返される気がした。

白い壁にはいたるところ泥のあとがついていた。仕事から戻ると手足は外のポンプで洗ったが、作業衣の肩が触れると壁は汚れた。エンジンの震動が小虫の群がとびまわるように空気を震わせていた。庭にマイクロバスが止まったのだ。じゃあ明日、と母の声がはずんだ。けたたましいテレビの騒音に、土を踏むひそやかな地下足袋の足音が混じった。一人ではなかった。

「ミッチちゃん、帰ってんだんべ」

母に呼ばれて満夫は玄関にまわった。ニッカズボンに丸首シャツの広次が立っていた。スーパーマーケットの紙袋を持って廊下に立った母が、さあさあと広次を手招きした。

「たまにはいっしょに晩御飯食べたらいいと思ってね。昔を思い出してさあ。みんなでビール飲もうよ。おつまみいっぱい買ってきたかんね」

満夫も母の背後から手招きした。おうよと広次は玄関で身体をはたいて砂埃を払い、大またでのっそりとあがってきた。母が紙袋を抱えたまま屈んで地下足袋や満夫のゴム長をそろえた。紙袋から大根の葉と長葱がでていた。百姓が野菜を買うとはなと満夫は思った。

「婆ちゃん、そんな気狂いみてえにテレビでっかくかけると、何だと思われるべ。はたの迷惑も考えてちょうだい」

母がマホガニーの扉を半開きにして叫び、テレビの音が聞こえなくなっただけから扉を閉じた。静かになり、耳がじんじん鳴った。また一悶着あるぞと満夫は思った。きつと明日の食事は母がいくらねばならない。台所にはいると冷蔵庫のモーターの回転音が聞こえた。満夫は冷蔵庫からビ

ールを三本とってならべた。みるみる壇は表面に水滴をならべた。

「土方はきつかんべ」

満夫は広次のコップにビールをつぎ、自分のにもついでいった。二人の爪に泥がたまっていた。「簡単だんべな。身体があればいいんだからよ」広次は一気にビールをあおり、はあっと息をついた。「百姓仕事で慣れてるけど、一カ月はつらいな。筋肉という筋肉が腫れあがるぜや。これを通りこすと固まって、一人前の土方さ。一生やれる」

「一生やんか」

「わかんねえや。田んぼもちょっとはあるしな。人夫じゃうだつあがんねえから、大型ブルの免許とろうと思つてよ。そのうち教習所通うさ」

「広次さんはすごいよお。馬力は誰にも負けないねえ。あんなに一所懸命やることないのにさ。日当は同じなのに」

母がテーブルにかかっていた新聞紙をとり、鯖が一切ずつ載った皿を満夫と広次の前にだした。いつ焼いたのかわからない固く冷たい切身だ。噛むと口の中で繊維が一本一本ばらばらになり歯にはさまった。口をゆすぐようにしてビールを飲んだ。

「こうしていると昔を思い出すね。広次さん、毎晩きてくれたよね。満夫が一人前の若い衆になつてくれたのも、広次さんのおかげだ。瘦っぽいの満夫が負けずに三杯食べたもんねえ」

母がコップを持って広次の前にすわった。陽焼けした顔が汗でクリームを塗ったようにてかてかしていた。小学校にはいらたての頃の満夫は食が細くて病気がちだった。学校へは田んぼの道

を一時間かけて通わねばならない。心配した母が、食欲の旺盛な広次と食事をすれば競合って食べるようになるだろうと、晩飯を広次にとりにきてもらったのだった。同級生の広次は当時から腕力が強く、上級生たちも一目おいていた。喧嘩になると身体の大きな上級生にでも猛然とかかっている、手あたりしだいに石を擲んで相手を血まみれにした。謝る隙もあたえない素早さだった。広次といつもいっしょにいた満夫は、年上の子供にいじめられた記憶がなかった。

母はスーパーマーケットの紙袋を破った。歯でビニールを千切り、ノシイカやピーナッツの袋を開いた。満夫は赤いものが眼についてバックに手をのばした。着色料で染めたタラコだ。

「おばさんは人気者だよ。男の喜ぶきわどい冗談いってよ。二十年以上つきあってるけど、おばさんがこんなさばけた人だとは思わなかったぜや」

広次はいつてピーナッツを一掴み口にはうりこんだ。母はうふっと笑って金歯を見せた。満夫は舌打ちした。

「いやらしいことばかりいつてんだんべ。親父の真似すつことねえんだから」

母は満夫の声など聞こえないとばかり、頬杖ついて広次を見ていた。

「格好だけは一人前だけどさ、広次さんの十分の一も働けないやね。交通整理してるだけだから。工事で一方通行の道をさ、緑と赤の旗振って、車走らせたり止めたり」

「みんないうこときいて気持ちいいべ」

満夫はラップに指を刺して破り、発泡スチロールの容器のタラコを長いまま一個手掴みで口に入れた。塩のかたまりを含んだように口中がざらついた。はきだしたいのをこらえ、ビールで喉